

—〈書 評〉—

加藤徹著 中公新書(1812)

『西太后——大清帝国最後の光芒——』

(愛知教育大学) 佐藤 豊

清末の中国の朝廷を代表し、また稀代の女性権力者としても有名な西太后は、高校の世界史の教科書にも必ず言及され、大学受験で世界史を選択した人であれば誰もが知っている名前である。本書は彼女に関する一般読者向けの概説書である。著者は京劇の研究者として学芸賞も受賞している加藤徹氏である。一読してまず印象に残ったのは、氏のユーモアに富んだ筆致であった。氏は今後この手の書籍を多く手がけることになるのではないか。ただ「清の歴代の后妃はおおむね不美人であった」というのは、いささか勇み足ではないか。美人の基準は歴史的にも、文化的にも偏差が大きいのので、一概に断定できまい。

またこの書には清末の歴史を知るのに必要な用語にわかりやすい解説が与えられていて、中国近代史への入門書としても十二分の役割を果たしている。たとえば、清末の賠償金などで必ず言及される銀両(テール)において、「銀一両＝約37グラム」、現在の日本の貨幣価値では一万円から十万円の間に対応するという解説を施し、読者の実感に合わせるように心掛けている。また西太后は宮廷での名前だけでも、「蘭貴人→懿嬪→…慈禧端佑康頤昭豫莊誠壽恭欽獻崇熙皇太后」と出世するごとに変わり、また宮廷内では「老仏爺(仏様)」と、光緒帝からは「親爸爸(実のお父さん)」と呼ばれていたことなど、中国近代の専門家以外余り知られてはいないことである。さらに清朝の歴代皇族の「字輩」は乾隆帝が母親に贈った言葉(「永綿奕載奉慈娛」——今後永久にお母さんを楽しませてあげよう、の意——)によって決定されていたことなど、清朝史に関する興味深い情報も数多く紹介している。

著者によると「日本で刊行されている西太后関係の著作の多くは、一昔前の古くて間違った俗説を引き」ずり「いっぽう現代中国の本も、いまだに『西太后は人民の敵だ』という中国共産党史観に呪縛されている」。従ってこの本の目的はそれらを排し「彼女の生涯の真実を浮き彫りにすること」に置かれる。著者はまず清朝＝満州人という図式を修正して、清朝の歴代の皇帝でさえ、后妃を八旗(満州八旗・蒙古八旗・漢軍八旗)の女子から選ぶという后妃選定システムによって、血統的には満州人・モンゴル人・漢民族の混血である、と指摘する。清末、孫文等の革命派が「滅満興漢」の民族主義を掲げたが、我々日本人の認識もその影響下にあるものであるといえる。清朝自身実は「帝国」的な体制であったのである。さらに、著者は「十世紀から二十世紀初頭に至るまでの中国史は、漢・満・蒙『三強』の回り持ち」であり、「現代中国の領土の半分は満蒙系王朝の遺産である」と指摘する。中国史(特に宋代以降)を漢民族の民族史として見る見方は、日本においても抜きがたいものとして存在するが、多民族国家である現代中国もようやく近年この事に自覚的な意見が出されるようになってきた。「あとがき」によると著者の夫人は旗人の血を引く「中国人」であるという。著者はいわば夫人の立場にたって、西太后を中心にした清末の歴史を書こうとしたのだとも言えよう。

西太后に関する「俗説」で最も有名なのは「葉赫那拉の呪い」である。これはヌルハチに滅ぼされたエホ部の首長による(満清滅亡の)呪いの言葉を、その末裔である西太后が権力の座について果たしたのだというものであるが、著者はヌルハチの孝慈皇后自身が葉赫那拉氏であったし、乾隆帝の妃にも葉赫那拉氏がいたことを挙げて否定する。また貧しい家の少女であった彼女が宮女として円明園に入り、たまたま咸豊帝の寵愛を受けて西太后にまでなったのだという「俗説」も否定し、

彼女が北京生まれの中堅官僚の家に生まれ、真正銘の「選秀女」(后妃選定制度)によって宮中に入ったことを指摘する。この書が明らかにした最も興味深い伝記的事実は、彼女が宮中入りして後、安徽の道員であった父親の恵徴が太平天国軍に対する対応のまずさを咎められて罷免され、失意の内に病没した件である。彼女が終生祖父の入獄事件と共に、この件に関して沈黙を守ったことは、彼女の衝撃と人柄を雄弁に物語っている。これが彼女の生い立ちについて様々な俗説が生まれた原因なのであろうが、彼女も清末の宮廷女性がもっていた宿命から逃れられなかった点の指摘は、等身大の彼女をイメージさせるのに十分効果的であった。

全体構成から見ると、後宮で「蘭貴人」から始まって戊戌の政変に到るまでの叙述は、歴代皇帝や皇族との関係について、野史・日記類に至るまで様々な史料を駆使して、わかりやすく精彩を放っていて、おもしろく読めた。特に恭親王から血を一滴も流さずに実権を奪い、その後も彼に対して失脚と復活を繰り返しながら政権を維持する政治手法には西太后の面目躍如といった観がある。また同治帝死後、後継は(養子なのであるから)本来次世代から選ぶべき所、西太后が皇太后の位置に留まるため同世代から選び、そのため同治帝の皇后が同世代の皇帝に対して皇太后になることが出来ず、結局自殺することになった悲劇は、中国式の宗族意識を考えると、単なる嫁姑問題としては片づけられない問題であったと今更ながら認識を新たにした。ただ戊戌変法以降の叙述には少し不満が残る。例えば、もともと体制維持の目的で西洋の技術を導入する「ハードな開発独裁」を認めてはいたが、戊戌変法に見られる国体の変更には反対であった西太后が、なぜ義和団運動以後あっさりと「新政」を実行したのか、と言う点である。歴史的趨勢と言うことで何とか理解できるとしても、この間宮廷内でどのようなドラマが

展開されていたのか、この点に評者は以前から興味を抱いてきた。著者は女性特有(?)の「非論理性」「変わり身の早さ」を指摘するに留まってそれ以上の説明はなかった。また義和団事件の時、列強に対する宣戦布告を無視した李鴻章などの洋務派官僚に対する態度(譴責せずにむしろ褒め称える)の説明も十分とは言えない。評者にとって彼女に対する謎はいよいよ深まった。

西太后の長期政権が続いた理由として、著者は「もし自分が王朝のトップに立てば、王朝滅亡と運命を共にしなければならない。王朝滅亡後の次の時代まで生き残るため、むしろトップでないところに身を置き、せつせと力を蓄える方が賢明である」という清末政界の「雰囲気」を挙げているが、下にいる人民にとってはこれこそが悲劇だという感慨をもった。この点を含めて本書の歴史評価には啓発される点が多くあったのだが、一つ気になる記述がある。それは辛亥革命の引き金となった「四川保路運動」を「甘い汁を吸えなくなる漢人保守勢力」の「反発」とし、清朝による鉄道国有化を「正論」とした点である。「紳商」が「地方的ボス」的な特徴を帯びていたことは否定しないが、民族ブルジョアジーの一定の発展と見ることも出来る。これに対する帝国主義銀行団からの借款を背景に持つ国有化を「正論」とするのは異論の多い問題であろう。

最後になるほどと感心したのが東陵盗掘事件についての記述であった。西太后も含む清朝歴代の皇族の陵墓が盗掘をうけた事後処理に、民国(漢族)政府が熱心ではなかったことが、後に溥儀が「満州国」建国に走る一因となっているという指摘である。周恩来が毛沢東との確執が生ずる前に、祖先の墓をコンクリート詰めにして畑の下に埋めていたという情報に接している今日、宗族的紐帯の中で生きてきた中国人の心情を改めて感じさせられた。

(2005年9月刊, 284ページ, 800円)